

パスポート保有率の低下

豊澤 幸平

日本人のパスポート保有率がここ数年、低下傾向にある。2010年台は約二五％程度であったが2023年は一七％に低下している。Z世代（十五歳～三十歳）に海外旅行に行きたいか、という質問をすると「行きたいと思わない」と答えた比率が五十七％と高率。同世代に留学したいか、と聞くと「留学したいと思わない」と答えた比率が五十三％、かたや韓国や欧米では二十～三十％台らしい。世界の旅行者数はほぼコロナ前に戻っているが、日本人の出国者数はコロナ前の六十％と伸び悩んでいる。

日本人全体、特に若者がなぜ海外を目指さなくなったのか。背景や理由として、言葉の壁（外国語の苦手意識）、経済的・制度的ハードル（円安他）、日本国内は社会インフラが整備され治安がいいこと、生活が快適で安心感がありわざわざ海外に行きたいと思わないこと、SNSで疑似体験ができること、と謂われている。またコロナ禍で海外へのハードルは一段と高くなったという指摘もある。しかし、これらの大半は、昔も存在した諸外国でも類似の要因がある。日本の減少は、現状維持と安定を優先し変化を避けようとしていることに由来すると考える。

その日本でも、スポーツ界の若者を見ると景色は大いに異なる。野球の大谷、今永、山本、サッカーの久保、三苫、バスケットボールの八村、ゴルフの松山、西郷、また五輪でも日本のアスリートは昔と比較して目覚ましい結果を残している。我々の若い時に比べ、海外で活躍する選手は多くしかも好成績を残している。彼らにとっては、自らの成長を求めて海外に飛び出すのが当たり前である。

また、海外での日本人の永住者数は多くないが年々増加、2023年は五十七万人と最多を記録した。

海外に行くことや居住することが必ずしも重要ではないが、世界を自分の目で見ることは日本や我々自身を知ることにつながる。意識改革を進め、経済的・制度的な障害を取り除き、「外の空気を知る」効果を訴える必要があろう。

（二〇二五年五月）